

保育者養成機関における「保育内容の研究」のあり方について

——カリキュラム化のための基礎考察——

江波 諄子
(常磐学園短期大学)

1. 研究目的

保育環境や 幼児の主体性に重きを置いた今回の幼稚園教育要領の改訂は、日々、保育研鑽に励んでいる保育現場にとっては、実質的に大きな変化はないと考えられるものの、保育者養成機関にとっては、保育内容に関する科目の再検討を余儀なくさせることになった。

筆者は、昭和63年夏に文部省より出された改訂案について、現行(昭和59年度版)の幼稚園教育要領との比較、検討、解釈を行った。本研究においては、前研究をもとに、5領域の構造や教育課程との関連について、さらに、教育職員免許法改正への対応として、「教育課程に関する科目」(保育内容の研究)の内容を検討を試みる。

2 五領域の構造について

領域については、「幼児の生活全体を通して総合的な指導を行うための視点」であり、「幼稚園教育が何を意図して行われるかが明確になる」視点であると説明されている。ここでは、5つの視点が意味する空間(視野)と 視点間の関係構造化を試みた。

＜健康＞周囲の影響と密接に受けながらも、個の中で育まれるもの

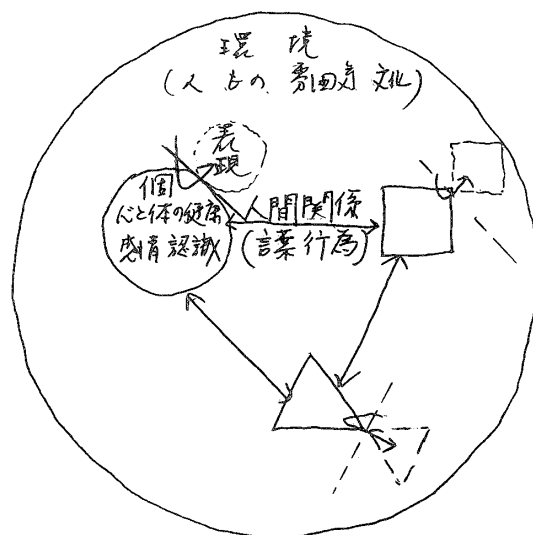
＜人間関係＞個と個 又は 集団と集団の間に働くメカニズム 言葉や行為によって具現されるが、それらさきみ出す感情や認識も含む。

＜環境＞とりまきの状況 特に、教育的雰囲気としての環境を重視し、単に物理的空間のみならず、有機的なかわりとして 人の存在を含む

＜言葉＞個と個の間に働くメカニズムのひとつの媒体と言語文化の両面を含む。

＜表現＞個と個の間に働くメカニズムのいくつもの媒体と、個の内なる創造的手段の両面を含む。

上記は、5領域のねらいや内容が意図する範囲と保育内容におけるそれらからの視野として現れたものである。これを図式化すると次のように表わせると考える。



3. 幼稚園の教育課程と五領域の関係

幼稚園の究極的な存在意義は、幼児に社会生活と営みためのふさわしい場を提供しているということである。幼児は、幼稚園という場の中で、自己の身体的、社会的、心情的、認知的側面の発達を、様々な人や物とのかわりの中で実現していく。しかし、家庭生活が成し得ない根本的な機能の違いは、社会生活の場を提供しているということである。このことは、以下の幼稚園での教育課程の内容をみても明らかである。

1 教師とのかわりど安定する時期

- ・教師とのかわりの中で園生活の第一歩を踏み出す。
- ・教師に親しみと持ち心の安定を得て周囲に興味の目を向ける

2 特定の友達とのかわりど安定する時期

- ・友達とのかわりを求めて動き始めるが、思うようにならない経験をする
- ・特定の友達を見つけるとかわり合う。

3 新たな友達とのかわりど安定する時期

- ・いろいろな遊びの経験をしながらかつ友達とのかわりを広げる。

4 身の合った友達と核として新たな友達にかかわ

- ・環境の変化と身体を受け止め安定感を保つ
- ・身の合った友達と核として新たな友達にかかわっていく時期

- ・自分のクラス以外の子どもにも興味、関心と強く持ち積極的にかわっていく。
- ・年長組とのかわりの中でたくさん遊びこみとする
- ・友達とかわりに深まりが出てくる。
- ・新たな友達を受け入れ、リーダー中心にまとまるようになる時期
- ・友達との結びつきが強くなり、遊びの中にリーダーが出てくる。
- ・自分の気持ちと相手に伝えていこうとする
- ・年長組としての自覚とする
- ・自分の力を試しながら挑戦していこうとする時期
- ・自分の考えをだし、相手の気持ちを読みながら、かわりを持つ
- ・友達や年中、年少組へのいたわりの気持ちも出てくる。
- ・いろいろな遊びに自分から挑戦していこうとする気持ちが強くなる
- ・話し合いながら作り出し、知的欲求が高まりと見せる時期
- ・園を修了して小学生になるということが分かり期待も大きく膨らむ
- ・課題に何ヵう活動にじっくり取り組む
- ・友達の良さを認め、自分の力にも自信を持つ
(在野附属幼稚園の教育課程より一部抜粋)³⁾

以上のように、幼稚園教育のねらいは、幼児にとってよりよい環境を与えることによって、幼児の発達に促しながら、社会生活と密着安定した個を育てることにある。とすると、前研究¹⁾の筆者はK. Reidの意味する The Nursery School = The Human Relationships Laboratory という概念を支持したが、今回の5領域の中で幼稚園教育の果たす究極の役割は、幼児の人間としての成長を支援するところにある。領域「人間関係」は「環境」という母体の中で育くまれる最も大切な概念となる。「健康」「言葉」「表現」は、保育において具体的に重要な研究分野ではあるが、これらは下位概念であると考えらる。

4. 「保育内容の研究」(教育課程に関する科目)の構造について

各保育者養成機関におけるカリキュラムの中で、「保育内容の研究」は(ほとんどの場合、6領域の名称とその科目名に使っていた。ここでは、これまでの考察とともに、カリキュラムとしての「保育内容の

研究」を構造化することと試みる。

保育者を養成する側として、「保育内容の研究」は、次の3つの課程に分けることができる。と考える。

- ① 理論を学ぶ課程
- ② 基礎能力を上げる課程
- ③ 実践・応用を考える課程

以上の3つの課程は次のような内容の学習によって、充足せらる。

① 理論を学ぶ課程

これは、いわば「考える授業」であり、保育における内容を知識のレベルで理解する

- ・幼稚園教育要領、保育所保育指針の理解
- ・健康と安全の知識
- ・保育研究法
- ・人間関係

② 基礎能力を上げる課程

これは、心と体を使った学習であり、保育における様々な活動を通して自身が試みながら学ぶ。

- ・運動・表現体育・音楽(歌・楽器・リズム)
- ・児童文化時(絵本・乗話・折り紙・手指遊び・初世の視聴覚教材)
- ・自然・社会現象(飼育・栽培・自然物を使った遊び、行事)
- ・美術(描画・造形活動・染色・織物)
- ・遊びの体験(伝承的な遊び・自由遊び等)

③ 実践・応用を考える課程

ここでは、1と2を合わせた上で、知識のレベルで保育についての実践を学ぶ。

- ・教育課程・指導計画の理解と実際
- ・総合的活動

5. まとめ

保育者の資質を問う形が提示された新教育要領にむけて、養成機関は、これまで以上に大学でのカリキュラムの内容の検討が必要とらる。保育の内容を更に理解した上でのカリキュラムの工夫さらに深めていきたいと考えている。

- 1) 「新・幼稚園教育要領の解説と検討」, 常盤学園短期大学研究紀要, 第17号 pp. 39-51.
- 2) 「幼稚園教育課程講習会説明資料」, 文部省, 茨城県教育委員会, p. 12.
- 3) 茨城大学教育学部附属幼稚園 研究紀要6 「幼稚園教育の普遍性を求めて」 pp. 44-49.